

アモス書

アモスは羊飼いであり イチジクを育てる農夫で
北イスラエルと南ユダの国境近くに住んでいました
北王国というのは第一列王記 12 章にあるように
それより約 150 年前に独立しました が
この時は軍事的指導にたけたヤ ロブアム 2 世が統治していました
彼はたくさんの戦いに勝利を収め領地を増やし富を蓄えました
しかし預言者から見ると彼は最悪の王の一人でした

豊かになった王は神への関心を失いカナンの偶像を拝むことを
許しその結果国には不正がはびこり弱者がないがしろにされた
のです アモスはそれに耐えきれなくなって
いました 神の呼びかけに応じてアモスは
北に向かい 大きな神殿のある大都市ベテル
に行くと そこで神の言葉を伝え始めました
アモス書は彼の数年にわたる説教と詩と幻をまとめたものです
これらは 北王国に対する神のメッセージ
を神の民に伝えるために後年まとめられたものですが
今日の私たちにも必要なメッセージです

この書の構成は明快です

1 章と 2 章は国々とイスラエルに対するメッセージ

3 章から 6 章はイスラエルとその指導者に対する アモスのメッセージが込められた
詩集です

7 章から 9 章はアモスが見た幻で

その内容はイスラエルに降りかかろうとしている神の裁きです

それでは詳しく見ていきましょう まずイスラエルの近隣諸国の暴力
と不正を糾弾する 短い詩が収められています

しかし奇妙なことに冒頭でアモスは

イスラエルに向けて語りと言っていたのです

これはどういうことでしょうか アモスが名を挙げている近隣諸

国の位置を地図で確認すると 円を描いていることがわかります

つまりイスラエルはその円の中心にあつて

ぴたりと狙いを定められている かのようなのです

そのイスラエルに対してアモスはほかの国より3倍も長く
厳しい調子の詩で非難しています
彼はイスラエルの金持ちが弱い
人々をないがしろにし 国が不正にまみれるのを気に留め
ず特に貧しい人を借金のかたに 奴隷として売った上彼らの訴え
に耳を貸さないことを糾弾しました これがかつてエジプトで不正に
苦しみ 奴隷にされていた状態から神に
救われた民族のすることだろう か
とアモスは嘆きます もう充分でしょう神の忍耐もここまで
です

次のセクションはその理由の説明
から始まります 私は地上のあらゆる民族の中から
イスラエルを選んだ と神は言います
これは創世記12章の 神がアブラハムの家系を国々への
祝福のために 選んだという箇所を指しています
そしてだからこそ私はお前の罪 を罰すると神は言うのです
イスラエルはずばらしい召しを 受けましたが
それには大きな責任が伴いました だから彼らの罪と反逆は重大な
結果を招くのです このセクションにはアモスの詩
がたくさん収められていますが そこにはいくつかのテーマが繰り返し
登場します まずアモスは何度も
イスラエルの富裕層と指導者たちの 宗教的偽善を暴いています
彼らは宗教行事には熱心で 捧げものや犠牲の供え物を携えて
くるのですが 貧しい人や社会不正には気にも
留めないのです こんな礼拝はごまかしにすぎず
神はそれを忌み嫌う とアモスは言います

彼らの人に対する態度が礼拝とは まるで結びつかないからです
もし本当に神との関係が築けている なら
人との関係も変わるはずだと神は 言っています
真の礼拝とは 公正が川のように流れ義が絶えない
谷川のように流れることだとアモスは言いました
この二つの言葉はアモスにとって またすべての預言者にとって非常
に重要なキーワードです 義へブル語のツェダカーとは社会的
地位に左右されない正しく公平 で平等な人間関係のことです

公正すなわちヘブル語のミシュパットとは不正を正し義を生み出すためにとる具体的な行動のことです

この二つは干からびた川を急流が満たすように
神の契約の民に浸透するべきです アモスが繰り返し糾弾している
もう一つのテーマは イスラエルの偶像礼拝です

北王国は南ユダ王国から分裂した 時
ソロモンの建てたエルサレム神殿 に対抗するため
神殿を2つ建てました 金の子牛を設置した神殿を2つ建て
ました これは第一列王記12章に記されています
それ以来イスラエルは性の神天候の神
戦いの神などに対する偶像礼拝を重ねてきました
預言者に言わせればイスラエルがこれらの偶像を拝むと
それは必ず不正に繋がるのです というのも
これらの神々はイスラエルの神のように公正や義を求めないどころ
かその神々自体が不道德な存在 だったからです
しかしイスラエルの神は違います イスラエルの神は私を求めて生き
よと言い 続けて悪ではなく善を求めて生き
よと言っています 創造者であるイスラエルの神を
礼拝することと 惜しみなく与え正義をもって善
を行うことは同じことなのです そしてこのセクションの最後の
テーマはイスラエルとその王が アモスと他の預言者たちを拒絶
したため 神は主の日をもたらすだろうということ
です これはイスラエルに下る大いなる
恐ろしい裁きです アモスは強い国が攻めてきてイスラエル
の街を征服し 虐殺し民を捕囚として連れ去る
だろうとはっきり言いました そしてそれが実現したことは周知
の事実です

約40年後攻め寄せてきたアッシ
リア帝国が アモスが語ったとおりのことを
しました アモス書はアモスが見たいくつか
の幻で終わっていますが その内容は主の日を象徴するもの
です アモスはイスラエルがまずはイナゴ
次に焼き尽くす火によって滅ぼされる幻を見ました

さらに熟れた果物のように飲み 込まれる幻も見ました
そして最後の幻でアモスは 神がベテルにあるイスラエルの
巨大な偶像の神殿の柱を打ち 建物が崩れ落ちるのを見ました
これは イスラエルの指導者と偶像の上に
下る神の裁きを表しています ついに終わりの時が来たのです

ところが最後の段落まで来ると 突然
一筋の希望の光が差し込みます イスラエルは崩壊した建物にたとえ
られています 神はその廃墟からいつの日かダビデ
の家を再建すると言います つまり将来ダビデの家系からメシア
なる王が現れ その王が神の民の家を建て直し
驚くことに その家族にはすべての国の人々
が含まれるのです イスラエルの罪とそれに対する
神の裁きによって引き起こされた 荒廃は
その日一転して様相を変えるの です
この最後の段落こそ重要です これが裁きの別の面にある唯一
の希望のしるしだからです そしてこのことを通して
アモス書が神の義とあわれみについて 教えてくれる書だということも
わかります 神が善なる方であるならば
神はイスラエルや他の国々の悪 を裁き
対処しなければなりません しかし神の最終的な目的は
世界を回復し新しい契約の家族 を作ることなのです
アモスの言葉を通して今の時代 を生きる私たちも
イスラエルの偽善とそれが招いた 災難から学び
神に真の礼拝を捧げる様にと招 かれています
その真の礼拝とは公正と義と隣人 愛に結び付くものです
これがアモス書です

500 字要約

アモス書は、羊飼いであるアモスが北イスラエルの国境に住み、神の怒りを伝える預言者として活動した物語です。北王国の富と繁栄に満ちていた時代に、アモスは神殿での礼拝と宗教行事だけではなく、社会的な公正と義を求める神の要求を強調しました。アモスは、富裕層が弱者を軽視し、不正に満ちた国になっていることを糾弾しました。また、イスラエルの偶像礼拝と宗教的偽善も厳しく非難しました。彼は神の裁きを予告し、その結果としての滅亡を警告しましたが、最終的には神がイスラエルを再建し、新しい契約の家族を築く希望を示しました。アモス書は、神の義とあわれみに関する教訓を通じて、真の礼拝が公正と義と隣人愛に結びつくことを強調しています。